若越郷土研究
38の1

沼津兵学校の福井藩員外生

山下　英一

はしがき

福井藩の英学に三つの流れがあった。一つは瓜生三寅の塾である。瓜生三寅は天保十三年（一八四二）の生れで、大正二年（一九一三）に亡くなった。瓜生の英学は長崎のフルベッキ塾に始る。文久一年（一八六一）の頃であった。明道館の英学教授（慶応三年）、訳書『交道起源』（明治元年）と英学者瓜生の道が開けてくる。彼が福井で英学塾を開いていたのは、明治二、三年の頃であった。学生には佐久間正（本多府中藩）稲生震也、雨森別、小野文哉、山岡次郎らがいたが、その数は分らない。しかしその名声は高かった。斎藤修一郎（府中本多藩。詳しくは後述）によると、彼の大学南校生時代に、「越前に閑居せし瓜生三寅氏を迎え、その校長たらしめ」とあることによっても分かる。もっとも明新館（明道館改め）教授で英学塾の瓜生の大学南校教師起用については松平春嶽があたった。グリフィスは福井着任前に、一時、臨時代用教師として大学南校で教えているが、その頃、フルベッキ夫妻と病気の瓜生を見舞っていた。グリフィスは彼が日本について初めて発表した論文のなかで、瓜生寅（三寅改め）を森有礼、箕作秋坪、加藤弘之、西周、内田正雄、中村正直、福沢諭吉らに伍して、翻訳者としての瓜生の業績を高く評価していた。瓜生が今、忘れられた存在だけに、残念であるが、稿を改めて書いてみたい。

次の流れは明道館改め明新館である。明治二年に始って、同五年の学制改革後まで続く。この学校の特色は四人の外国人教師を雇ったことで、最初にバーミンガム出身の英国人ルセー、次にフィラデルフィア出身の米国人グリフィスの二人が教えた。そのあと、二人に代って米人、マゼット、ワイコフの二人が来たが、すでに廃藩の後であった。従って福井が藩の政府であった頃、明新館で英語を教えるルセーと理化学を講義するグリフィスは、時代を先取りしようとする画期的な藩の方針の注目するところであった。彼等から学んでとくにグリフィスとその生涯を通して互に子弟の交流のあったのは、雨森（旧姓、松原）信成と今立吐酔の二人である。グリフィスと明新館については拙著『グリフィスと福井』（昭和五十四年発行。福井県郷土新書5）を見ていただきたい。

英学の三つ目の流れは、沼津兵学校へ福井藩派遣の留学生である。沼津兵学校は徳川家の駿府移封によって、江戸の洋学者西周ら、すぐれた人材を集め、幕府所蔵の西洋の書物と器械を沼津に運び、洋式軍制にもとづく陸軍士官養成を目的とした学校であった。しかし軍事関係だけでなく、英語、仏語、数学といった広い西洋知識の教育が行われた。この学校に他藩からの希望者を入学させる員外生と呼ぶ組織があり、軍人を志望しないで、洋

学、数学を学びたい者のみが留学してきた。他藩からの留学生は、実際は、数十名に及んだといわれている。員外生教授方は杉亨二で蕃所調所教授で蘭学者であった。なかでも福井藩からの員外生が最も多く、つづいて徳島藩であった。永見裕、松原平（後の秀成）、斎藤修一郎らがいる。それには福井藩が徳川家の親藩であり、松平春嶽の洋学への並々ならぬ関心が反映していた。

沼津に近い静岡にも時を同じくして静岡学問所が設立されて、津田真道、中村正直ら洋学者が教授した。特記することは、伝習所を付設して米人の理化学教師クラークを雇った。これは福井のグリフィスが勝安芳（海舟）の依頼によって友人クラークを推薦したものである。

このように見てくると、明治に改元してすぐに着手しなければならなかった改革の波に翻弄されつつも、確実に新しい制度への前進があった。英学が主流を占めてきた洋学への関心にあわせて藩ごとの教育機関の改革が行われて行く。それが廃藩までの短かい期間であるが、福井では三つの流れがあった。野心と向学心に燃える若き英学生はそのどれを選択するかによって、その前途も分かれていく。いずれにしても、主としてこれら士族の子弟の英学への強い関心と欲求は従来の藩のわくを越えて、日本の国内外へと大きく流動していった。

一、沼津兵学校の修業課程

ここに『徳川兵学校掟書』という学則書がある。生徒之事、教授方之事、学課之事、試業之事、休業之事、生徒病気並忌服之事、生徒罰則之事の全八十四条から成っている。徳川兵学校とあるのは沼津兵学校に改名（明治二年）前の名称である。これによると、入学者は徳川家の家臣のみで、年令は十四歳より十八歳に限られていた。生徒は資業生（附属小学校生徒、その他の静岡藩立小学校生徒で第一試に合格した）、本業生（第二試に合格）、得業生（第三試に合格）の三段階がある。資業生の修業年限は四年、本業生は三年で、本業生は歩兵将校之科、砲兵将校之科、築造将校之科のうち一科を修業しなければならない。しかし兵学校の存続期間が廃藩のために短かかったので、本業生に進級した者は皆無であった。

員外生について次の条項が入っている。（但し、「生徒之事」に関する条のみ）

第十八条　元来本業生と可相成情願には無之他之志願にて資学生と相成修業致度存候者は志願之趣委細申立第一試を経候て兵学校員外生之名義にて資業生と相成候儀御免相成候事

第十九条　兵学校員外生は小学試業之外第四条合格之吟味に及はす月々修業料として銀拾五匁差出し司申事　但学校内総て褒賞有之節は其列にあらさる事

第廿条　員外生にても資業之修業宜敷第二試合格にて本業生に転し度情願有之第三条合格にて第四条手続相済候者は登級修業相許得業生仕進之明き有之節本員に充候義相許候事

第十八条によって員外生も資学生を志願して第一試に合格すれば資学生に成れるという。さらに第二試合格で本業生に進級できるといった奨学の条もある。員外生の資格は小学試業に通って、授業料銀十五匁を支払うことであった。

福井藩員外生の進級がどうだったかはしばらくおくとして、どんな学課を学んだのだろう。『徳川家兵学附属小学校掟書』によると「童生之書」の第五条に「小学修業は年期無之事尤兵学校資業生入相願候者は拾八歳限り之事小学之課程は左之通り　素読　手習　算術　地理　体操　剣術　乗馬　水練　講釈聴聞　右日課定書之通修業可致候事」となっていた。十八歳で資業生に入学できるというから、福井藩員外生のなかにはその条件を充たす者が何人かいた。『徳川家兵学校掟書』の「学課之事」によると、「外国語学　英佛之内壹科　究理　天文　地理　歴史　数学　書史講論　図画　調馬　試銃砲　操練」となっていた。

二、福井藩員外生

記録にあるものとしては、『西周全集』（第三巻）に「福井藩留学生名簿」が入っている。

永見　裕		
本多英雄	二十才	
本多貴一	二十才	
松平八十一	廿一才	
津田拾五郎	十九才	
松平　平	十六才	
明石源蔵	十八才	
粕谷素且	廿一才	
木滑貫人	廿一才	
坂野秀三郎	廿五才	
美代漣蔵	廿二才	

永見以下十一名である。しかし十三、四人とする例もある。「越前藩士永見裕同藩子弟数人を率ひて来て西頭取の私塾に於て授業せられん事を請ふ頭取乃ち藩知事に此輩を小学校兵学校に入れ藩士と同く教授せん事を請ひ許されたる後前後十三四人留学す」。またこんな例もある。「官僚派の錚々たる人物として将た実業界の腕利きとして知られたる故斎藤修一郎も兵学校出身の一人也。彼は福井の産にして遙々同輩二十余名と笈を負ふて沼津に来れり」。また沼津市の「明治史料館通信」にはこうある。「明治二年（一八六九）十月から十一月にかけ、永見裕を引率者として、松平八十一、本多英雄、本多勝三郎（貴一）、津田束（拾五郎）、松原秀成（平）、明石源蔵、粕谷素直、木滑貫人、坂野秀雄（秀三郎）らが来沼し、兵学校に入学した。この他、佐久間正（若代漣蔵）、杉田悦三郎、服部寛一といった福井藩留学生の名前も知られる。」十三名であるが斎藤修一郎が加わると十四名になる。

福井県立図書館所蔵の「士族・子弟輩・新番格以下」の履歴台帳から沼津学校、沼津兵学校または沼津学校修業の文字の見つかった者の名前を書き出して見た。（空白は不明をあらわす）

士族	修業年	年令
本多　範（斐雄）	明治二年	
本多貴一（勝三郎）	二	二〇
松原　平	三	一八
杉田悦三郎	二	二一
子弟輩		
大門熊蔵	三	二〇
若代　正	三	
津田　束	三	二〇

中根西一　三　二六
永見　裕　三　三三
松本正秀　二〇
明石仁源蔵　一八
木滑貫人　二二
新番格以下
斎藤修一郎　二〜三　一六
佐久間　正
（以上　十四名）

沼津の資料と福井の記録で、共通な名前は永見裕、津田束、明石源蔵、木滑貫一、本多英雄、本多貴一、松原秀成、杉田悦三郎、斎藤修一郎、佐久間正の十名である。どちらか一方にしかない名前は大門熊蔵、若代正、中根西一、松本正秀（以上福井）、坂野秀雄、松平八十一、服部寛一、粕谷素直、松平平（以上沼津）の全部で九名である。共通の十名と合せると十九名になる。

なにしろ明治二、三年というと既存のものがめまぐるしく変動する時代であったから、留学生の数ひとつとりあげても確かな記録は不可能であったろう。それでも彼等のなかには、資業生に及第した六名がいた。坂野秀雄は第五期生として、松原秀成、佐久間正、津田束、松平八十一は第六期生として、杉田悦三郎は第七期生として沼津兵学校の人材の仲間入りをした。

三、員外生の動向

沼津兵学校員外生のなかには瓜生三寅の塾や明新館で学んだ者もいた。その動向を知るのは興味がある。それには、四つのケースが考えられる。

イ　最初から員外生になった者。
ロ　明新館から沼津兵学校へ移った者。
ハ　瓜生三寅塾から沼津兵学校へ移った者。
ニ　瓜生三寅塾から明新館、そして沼津兵学校へと移った者。

本多範（二十歳）は「ロ」の場合である。明石源蔵（嘉永五年―明治四十四年）は「ハ」の例である。佐久間正（府中本多藩）は「ニ」に属す。府中藩は福井藩の属領で斎藤修一郎も府中の出身だが、彼は府中藩校立教館に学び、沼津留学を命じられた。十四、五歳であった。では「イ」はどうかというと、記録は見ていないが、留学生の年令が二十歳前後の者の多いところから、おそらく明道館、明新館に学んだ者であろうと思われる。服部寛一は明道館から西周の京都の塾で学び沼津に入る。佐久間正は府中立教館句読長から瓜生三寅塾そして沼津入学。であるなら何故、沼津へという問題が起るのだが、これには引率者、永見裕の存在が大きいようだ。瓜生三寅、グリフィス、永見裕の三者の存在が、福井藩の英学に大きな影響を与えたということができよう。

永見裕、斎藤修一郎、松原秀成の三者については詳しく述べることになるが、その前に員外生のなかでその後の個人の歴史の記録があれば、ここに紹介しておきたい。

明治三年（一八七〇）九月、教授方頭取、西周が明治政府の徴命で、兵部省に出任のため上京したそのあとを追って、永見裕は松平八十一、松原秀成、津田束、明石力（源蔵）を率いて東京に移り、西周の育英舎に入塾した。これには西周への春嶽の懇請があったといわれる。佐久間（弘化三年―大正五年）は福井中学英語教師、福井県師範学校長、武生町五十七銀行頭取の職についた。『小学博物

学』（明治十六年）の著書がある。明石力（嘉永五年―明治四十四年）は福井中学で明治二十六年から四十四年まで英語を教えた。木滑貫人は明新館に移り、グリフィスの生徒になった。明治政府の命令で各藩二名の学生が選ばれて、海外留学をすることになり、十数名のいずれもすぐれた学生のなかからグリフィスが木滑貫人を選ぶ。もう一人は役人の選んだ山岡次郎で、彼は瓜生三寅口訳『交道起源』の筆記をした者であった。木滑はニューヨーク洲オルバニーの*The Observatory of Union University*ニュージャージー州ホボケンの*The Stevens Institute of Technology*の科学技術の学校で学び、帰国後、政府官吏になる。山岡はプリンストン大学、ニューヨークのトロイにある*The Pensselaer Polytechnic Institute*コロンビア大学鉱山科などで理化学を学び、文部省役人、開成学校、東京府師範学校で教えた。斎藤修一郎は沼津兵学校在学中に、福井藩貢進生として大学南校に入学した。斎藤修一郎と松原秀成については、のちほど詳しく書くことになる。沼津に留った貝外生のうち坂野秀雄は名古屋市で弁護士を開業した。

明治二年から四年にかけてのわずか三年ぐらいの間に、地方の藩で士族の子弟たちが洋学、とくに英学の関心と必要をどういう機会をとらえて、充足させていったか。数少ない例でしか見てこれなかったが、彼等の精神が、西洋文明への好奇心と摂取力に駆られて、羽ばたいて行ったことは疑う余地がない。そのなかでも瓜生三寅、西周の塾、沼津兵学校に留った貝外生は総じて、英語教師の道をとり、明新館や大学南校で外国人教師に学んだ者は海外への留学をめざしたのは、当然といえば当然だが、必然的な進路であったのは興味深い。

この項の最後に、沼津留学に際して藩より通達の文書『修行生規則』を記しておこう。

一、今般駿州沼津学校江爲修行御遣之御趣意ヲ厚奉載シ日夜可致勉励事
一、沼津学校規則之通堅可相守事
一、衣食ヲ始銘々成丈ケ質素節倹ヲ主トシ総而奢ケ間敷儀有之間敷事
一、休日之外一切禁酒猥ニ他出致間敷事
但休日タリトモ大酒沈酔ハ勿論総而酒宴ケ間敷儀有之間敷事
一、学校其他集会節モ学科研究之外猥ニ国事ヲ批判致間敷事
一、生徒之順ハ学業之優劣ニ可随事
一、来々未年八月帰藩可致事
右之ケ條ヲ違背シ旦遊惰ナル者ハ速ニ帰藩被仰付至当之御所置可有之事
十月（二年）

四、永見裕―天保十年（一八三九）生れ　明治三十五年（一九〇二）歿

永見裕（ゆたか）は、福井藩士永見一学の次男として福井城下に生れた。安政二年（一八五五）、藩校明道館に入学、句読師を勤めた。中根雪江の推挙により京都へ遊学し、慶応二年（一八六六）、秋田稲人に就いて漢学、西周の私塾で英語を学ぶ。「慶応二年六月ヨリ明治元年一月マテ幕臣西周助ニ就テ英学修行」（永見履歴書）。戊辰戦争に於て北越戦線で戦功をあげ、帰藩後、軍事掛となった。明治元年（一八六八）、藩命により九名の藩の子弟を率いて西周の沼津学校に留学した。一時帰藩して明

治二年（一八六九）、沼津留学修業生徒寮長の藩命を受け、留学生数名を率いて再び沼津に来て、藩子弟十数名を見守る。永見は兵学校に入学はしなかったが、教授の田辺太一、杉亨二に教えを受けた。西周より文武学校基本並規則の指示を受けて、福井藩に復命し、藩は之により学業に改良を加えたといわれている。明治三年（一八七〇）、西が新政府の徴命により上京したので、永見はこれを藩に知らせた上、春嶽の命により、六名の福井藩員外生（前述）を率いて上京した。西は春嶽の懇請により、家塾育英舎を開いて彼等を教えた。永見は塾頭格となる。

陸軍に奉職の永見は明治四年（一八七一）兵部中録、同七年陸軍中尉に任ぜられた。明治十三年（一八八〇）、陸軍を辞職した後は、山形県、宮城県の官吏に転じ学務を担当した。仙台では私塾静竹舎（饒香舎）を開いたが、高山樗牛はその門弟の一人である。小樽に隠栖してそこで歿した。亨年六十三歳。妻鎮子は西周の養女である。

西周との出合いが永見の仕事を運命づけた。その一つは福井藩の藩士の子弟を藩命で沼津兵学校へ入学させることに使命を感じてした仕事。一つは西周の漢学と洋学の学術を理解し、記録にとどめて後世に伝えた仕事。一つはその西周直伝の洋学ゆえに松平春嶽に待遇されて、春嶽に英語を教えた仕事であった。

永見の筆録は『燈影問答』『百学連環』の二著でいずれも明治三年冬、育英舎塾に於ての西の講話、講義である。『燈影問答』は題名の如く、問（「冬の夜のつれつれに或ル人のしひて乞はるゝ疑問」とはしがきにある「或ル人」とは春嶽である）の追うまゝに西が意見を論述するものである。文久二年（一八六二）、幕府オランダ留学生として、ライデン大学に学び、フィセリング教授から法理学、国際公法学、国法学、経済学、統計学を学んだ西のことだから、答える内容はこれら全般に及んでいる。

国政のあり方として、万民の撫育、産業の開発、人材の養育、国富の増進をかかげて、その根本思想に「自由」を置く。貧富貴賤の別なく万民を同じ人と見る。人は生来有する自由を束縛されてはならない。自由放任が人の性なら、同時に善悪をわきまえる知恵も備えている。自由と法の正しい道が政治のなかで行われなければならぬ。これは西周の西洋哲学に儒学を導入した思想であった。さらに産業を国民生活の基とし、勤労の目的に人民の生来もっている快楽欲求の自由を第一に置く。殖産興業に必要な金銀の融資や貸借返済の原理について説く。人材教育については勝れた教師の人選と、天性英敏なる学生をその性格、能力に応じて適切に指導する。そこで学問はまず、日本の古今、さらに漢学、そして始めて西洋の学を習うのが肝要である。学生の苦学は文明国ではあってはならないことで、遊学には英敏で、篤実、篤学な上に、相応の財産があって、衣服飲食に不自由しないことが条件だと語る。

『百学連環』について永見の手記にこうある。「明治三年十月ヨリ西周私塾育英舎ニ於テインサイコロヘシアニ拠リ史学・地理学・文章学・数学・心理学・哲学・格物学等ノ諸学科ヲ研究シ同四年九月其稿十冊ヲ編輯シテ百学聯環ト称シ之ヲ藩廳ニ差出ス」。諸学科のなかには他にも法律学、経済学、天文学などもあり、その口述は一読して、噛んでふくめる

ようにして西洋の知識を聞かせている印象を与える。もちろんこれはなま易しいことではなく西周の西洋学を自家薬籠中の物とした実力と、新しい知識を写しとった永見の英語力に脱帽せざるを得ない。福沢諭吉、森有礼に沼津兵学校教授の津田真道、静岡学問所教授の中村正直ら幕臣の洋学者らと西周は明六社を結成した。グリフィスがこの社員で唯一の外国人であったのは春嶽との関係からか、今後の課題になろう。

その春嶽に永見の筆写したこの両書が送られていて、「西周先生百事練磨和漢洋の周学力を以ての講義感服して驚くほどなる非常の大知識を伺はれたり」などと、永見に書き送り、*Y.N.Matsdaira*の署名を付けていた。興味あることは永見が春嶽に英語を教えていたということである。春嶽が英語の稽古日に用があって休みを知らせた自筆の手紙が残っている。

今十三日　御歌会ニ付被為召午後第二時参　内候間今日之稽古ハ御断り中候間十五日十六日両日之内例刻ヨリ参荘可給候也　七月十三日　永見裕殿　YNM

この英語稽古にまつわる春嶽の和歌がある。永見の講じた英文法の人称を和歌に託している。（短冊）

First Person

すみた河堤のさくらさきにけり
あさも夕へもひとりめてつゝ　慶永

Second Person

正木つら長き春日のなくさめに
きみと遊ひて酒をくまなん　慶永

Third Person

君とともに遊へるけふのたのしさを
ひとにはつけよ山さくらはな　慶永

蛇足になるが、一人称は「ひとり」、二人称は「きみ」、三人称は「ひと」との概念を得たよろこびを歌に表現したのであった。

五、松原秀成―嘉永七年（一八五四）生れ　大正十三年（一九二四）歿

松原秀成（ひでしげ）は幼名を平（ひとし）といって、秀成に改名したのは明治五年（一八七二）であるから、沼津兵学校の生徒の時は、松原平であった。福井藩士松原十郎義成（中級武士）の長男。松原家は知行高百石で、秀成は九代目であった。以下『松原家代々勤書』にもとづいて、私見を入れながら松原秀成の履歴を見てゆくことにする。

沼津兵学校の松原秀成

明治元年（一八六八）
勤勉のため賞賜を受けているが、明道館でのことか。

同　二年（一八六九）
沼津兵学校に藩費留学。沼津の旅籠屋米屋藤十郎（藤兵衛）に止宿。

同　三年（一八七〇）
格別に勉励したの理由で、金二十両を受けるとあるから、松原は員外生の模範であったのだろう。資業生に進級。修業後、永見裕に導かれて五名の福井藩資業生とともに上京、浅草鳥越三筋町の西周の育英舎に入塾。「明治

三年十一月四日　晴　休暇　津田、松原来る塾定る」（西周日記）石町三丁目　茗荷屋市右エ門に寄宿。

同　四年（一八七一）

廃藩置県の詔書。実父十郎、病身隠居のため、平が家督相続することになる。給禄は父と同様、一四六俵一斗四合。育英舎を修業し、一旦帰国。再び上京して、小川町広小路の西周方に入塾。

同　六年（一八七三）

西小川町一丁目一番地の西周方にて修業していたが、更に洋学修業のため、新潟へ行くことを敦賀県出張所に申し出る。新潟英学校が外国人教師を雇うことになり、英語が直接に学べる（語学直伝）ところから、その学校につとめることにした。沼津兵学校から西周の塾まで行動を共にした同郷の津田東、英国人エドワード・ゼームス・モス、通訳の橋口正弘、家僕一人の五人が同道の官費旅行であった。新潟英語学校は明治五年十一月、新潟の石附五作によって作られた洋学校のことであった。明治六年五月新校舎が落成し、校名も新潟学校と改め、県立学校としての基礎を固めた。同校では基礎英語から始め、英文教科書を使って、地理、歴史、代数、物理、化学等を教授していた。モス（*Edward James Moss*）は英人の新聞記者で、月給二〇〇円で新潟県下戸長総長石附五作に、明治六年四月六日より三年間、この新潟学校で雇われた。松原は新潟県庁「英語学校寮長兼句読申付候事」（月給八円）。「新潟学校一等句読師」（月給拾円）。「一等句読師試補」（月給拾三円）。「新潟学校一等句読師」（月給拾五円）、塾長料弐円。このように松原は始めは生徒に書物の読み方を教えながら、寄宿者の舎監をしていた。

明治七年（一八七四）

新潟学校第一分校の長岡洋学校へ出張。再び新潟学校にもどり、本塾副長になる。分校出張と教師の仕事によく務めたとの理由で金五円の賞与を受ける。退職して一時、福井に帰る。この年三月に官立新潟外国語学校が開設されて、これはこの年に始まる全国的規模の英語学校の一つで、第六大学区の本部新潟に置かれたもので、英学及び英語基礎科目に重点があり、通訳のような語学専門家養成の学校でもあった。さらに興味あることは、秀成の弟、信成（のぶしげ）が文部省令によるワイコフの官立新潟外国語学校赴任に同行して新潟に来たのである。信成は安政五年（一八五八）生れ。明治四年（一八七一）、藩校明新館で英人アルフレッド・ルセーに英語を、米人ウイリアム・エリオット・グリフィスに理化学、英語を習った。明治五年（一八七二）、横浜の米人宣教師サムエル・ブラウンに学んだのち、福井の第二十八番中学（明新館改め）の米人理化学教師マーチン・エヌ・ワイコフの通訳になる。明治六年、雨森右膳（上級武士）の養子になって、雨森信成と名のった。すでに英語を正確に話し、英文教科書の翻訳もする英語に堪能なところから、ワイコフの推薦もあって、官立新潟外国語学校でワイコフの通訳にあたったかも知れない。一方、秀成は新潟外国語学校教員に雇われることを希望し、原籍と身元取調べの結果、採用になり、旅費拾四円六拾四銭弐厘を敦賀県福井支庁より請取って九月新潟に赴く。木内盛潔伜升次郎、僕一人、舟橋の森田で伊藤文平伜定吉を連れて出立する。「新潟外国語学校教諭心

得」に採用された（月給二拾五円）。新潟東堀前通六番町小山長蔵方に寄留。ここのところで松原秀成、信成の兄弟はあいまみえるのである。秀成二十歳、信成十六歳の若き英学徒であった。しかし信成の方はブラウンによってキリスト教徒になっていて、伝道が目的であった。ブラウンはモスに先だつこと四年前の明治二年に、新潟学校の前身の洋学校で教えていたので、信成の新潟伝道にはブラウンの勧めがあった。彼はパームというエジンバラ医療宣教会派遣の宣教医師について通訳兼助手をした。しかし真宗の盛んなここでの伝道は身を危険にさらすことになり、数カ月後信成は横浜に帰りブラウンの塾に入った。その後の雨森信成については、拙論『人間　雨森信成』（若越郷土研究三十三巻四号五号）を参照されたい。

明治八年（一八七五）

新潟英語学校（新潟外国語学校改称）の月給三拾円。校長、三穂健道。邦人教員三名、外国人教員一名（ワイコフ。月給二五〇円）。吏員二名であった。生徒は六十七名になったが、他の東京、愛知、大阪、広島、長崎、宮城の官立英語学校がいずれも一〇〇名を越える生徒数にくらべて少なかったのは、並立の新潟学校の影響があった。松原秀成の改正金禄高が弐百六拾円弐拾五銭四厘となる。（但、明治五年より同七年まで平均相場米、壹石につき金三円九拾銭二厘四毛五糸）。

明治九年（一八七六）

福井の佐佳枝上町宅（元鳩ノ御門内とも漆御門ともいう）から神楽上町西尾雄蔵宅（元神明前、のちの宝永上町）を買請けて移転する。新潟英語学校教諭を辞職。秀成は足掛け四年、新潟の教員生活で英人モス、米人ワイコフから直接に英語を学んだことになる。上京して東京西小川町一丁目一番地の西周宅寄留届は表向きで、その実は横浜二十八番ヘラルド新聞社に就職、和文英訳の仕事をしている。明治十年一月十日迄、月々の給料参拾七元を得る（但、本給弐拾五元、英文商用書簡翻訳料十二ドル）。横浜にはヤソ信者と呼ばれて福井の養子先から縁を切られた弟の信成が居て、メリー・キダの学校（彼のフェリス女学校）の教師であった。秀成の就職に信成が関わっていたと想像するのは難くない。横浜の三大英字新聞はジャパン・ヘラルド（一八六一―一九一四）、ジャパン・ガゼット（一八六七―一九二三）、ジャパン・メール（一八九〇―一九一七）であった。秀成の働いていた頃のヘラルド紙の社屋は水町通り六十一番から移転した二十八番で、その後、六十番へ移った。新潟英学校に雇われたモスはジャパン・ガゼット紙の最初の社員で植字係であった。

明治十年（一八七七）

横浜二十八番ヘラルド新聞社を辞職して、福井へ移った。長男で両親の面倒を見るためで、二十五歳であった。弟信成はこの年、東京築地の東京一致神学校（後の明治学院）の開校と同時に神学生二十四名の一人として入学した。

明治十二年（一八七九）

研成義塾という私塾を開業する許可を受ける。（十月六日）ここでは「洋書を使用して普通学を授けたり」という。

明治十三年（一八八〇）

所用で上京し、津田束方（東京府深川区福住町九番地）に寄留した。

以上が若き松原秀成の英学修行の有様である。明治十五年、結婚した。妻、佐多は慶応二年生れ。大正八年に歿。福井市鎮徳寺（曹洞宗）に葬られる。男四人、女五人の子供があった。明治十四年（一八八一）、明新中学校が改称して福井中学校となり、明治二十年ごろ、松原秀成はそこの英語教師であった。貧乏したが松平春嶽の計らいで、中学教員の英語、漢文の免許を貰っていた。同僚に沼津兵学校時代の佐久間正もいた。秀成の沼津の学窓は忘れることのできないものらしく、西周が仙台の永見裕への便りに「此間久振ニ而松原秀成君罷越一日閑談致申候」（明治二十三年六月二日）とある。

福井中学では天神様という渾名があったそうだが、品位な人柄がうかがえる。その後、福岡師範、和歌山中学（明治三十一年―三十四年）、富田林中学、福井商業（明治四十一年―大正九年）と教鞭をとる。著書に『学芸之進歩』シンモント著　松原秀成訳　福井　松原秀成　明治十七年発行　百十六頁。『英文典術語集』宝文館　明治三十五年発行　五十六頁がある。福井市鎮徳寺に葬られる。享年七十歳であった。兵学校教授が明治政府からの出仕命令で辞任してゆき、学校開散の事態に至った時、十六歳の秀成は明治政府への任官を勧められたが、断った。松原兄弟はそろって藩閥政府を敬遠していたといわれている。

松原三兄弟　秀成（中央）信成（右）元成（左）

六、斎藤修一郎―安政二年（一八五五）生れ　明治四十三年（一九一〇）歿

斎藤には晩年の明治四十一年（一九〇八）、渡米先で著わした『懐旧談』という自叙伝がある。これは彼が人生五十年を顧みて、その生涯を父が子に語って、子らが将来に何か益になる処生法を伝えるという意味のもので、語り口はなめらかで勢いよく、面白く、斎藤修一郎の面目を伝えていて興味深い。これは福沢諭吉の『福翁自伝』を思わせる文章で、明治の自伝文学のなかに入れて少しも遜色がない。斎藤についてはもう一つ、『福井県南条郡誌』（昭和九年発行。南条郡教育会）の「武生町人物」にその履歴がくわしく記述されている。その他、沼津兵学校員外生のなかでも斎藤は他の員外生や資業生とともにすぐれた業績をもつ人物の一人として理解されている。また大学南校の貢進生に選ばれる。これは地方の秀才を地方費で中央の学校に遊学させるもので、明治三年わずかの間のことだったが、これで大学南校に入学した貢進生は三百十名あった。そのあと斎藤は、法科の第一級に編入され、明治八年（一八七五）、明治政府の第一回官費留学生として渡米し、ボストン大学に学んだ。

以上をみても、斎藤修一郎は先述の永見裕、松原秀成にくらべて、今日もなおその存在の知られる人である。しかも若くして清濁あわ

せのむといった人柄だけに修一郎について書かれたもののなかには、修業中の彼の操行についての残念な記事もある。従ってこれらの資料にもとづいて斎藤修一郎の英学修業を中心に書くことにする。

その前に簡単な略歴を記す。斎藤は本多府中藩（現在の武生）の眼科医の家に生れた。秀才にして勤勉であったので、十四歳の時、藩の立教館の御近辺に生徒のなかより選ばれる。これは立教館の教師全員が出仕する輪講であった。明治二年（一八六九）、福井藩員外生に選ばれて、沼津兵学校附属小学校に入学。翌年、府中藩の貢進生として大学南校に入学。明治六年（一八七三）十月九日、明治天皇の学校行幸に際し、法学生を代表して英語で御前講義を行う。法律の緊要と教化を述べた斎藤の講義は西周の洋学に負うところがあったと思われる。時を同じくして開成学校（大学南校改称）教師グリフィスも明治天皇に化学の実験授業をして見せている。明治八年の米国留学については後述することにして明治十三年（一八八〇）、帰国後の斎藤は、当時、外務大書記官であった武生出身の渡辺洪基（弘化四年―明治三十四年。明治十九年東京帝国大学総長）の紹介で、井上馨伯に識られ、外務省書記官になる。明治十八年（一八八五）、条約改正の英文の案文をお雇い仏人教師ボアソナードに手伝ってもらって、仏文に翻訳した。明治二十五年（一八九二）、第二次伊藤博文内閣の農商務次官をつとめた。明治二十七年（一八九四）、東京米穀取引所より金時計を貰ったことが収賄問題になって失脚、退官する。実業界に転じ、内国鉄道全社取締役、中外商業新報社長などをつとめたが、不遇のうちに逝去したといわれる。享年五十五歳。伊藤痴遊『傑人斎藤修一郎』、徳富蘇峰の弔文『人物偶評』がある。

修一郎の沼津在学は明治二年二月から翌年の十月までの短かい期間であった。そこでの生活については「他の旧幕臣子弟が駿河半紙でさえ思うように買うことができなかったのに対し、高価な西洋紙を惜し気もなく使い、服装や持物からして貴公子のようであった」と書かれていたり、さらに「彼れが兵学校時代に沼津本町の花柳界に沈湎して芸者買ひの味を覚え身を持崩したから也」と書かれていたりする。とくに後者は彼の政治家としての失脚と不遇な晩年は、この沼津生活にその兆しを見ている。また員外生について「されど独り福井藩人と云はず之等の所謂留学生は、給与の豊富なりし為に自ら放縦に流れ贅沢に赴くの嫌ひあり、一般貧業生の規律厳正なりしに比し屢々風紀を紊したりとの評判もあった」とも書かれている。

これでは「福井藩修行規則」の質素節倹、奢侈の戒めに大いに反する生活といわざるを得ない。修一郎についていえば、彼の性情に規則に縛られたくない面もあったと思われるが、毎月十円の遊学費を貰っていたというから、案ずるところ修一郎少年に他の生徒にない風雲児のおもかげがあったと思ってもいいようだ。むしろ彼が自叙伝で触れていない所もわかって面白い。

というのも修一郎は西周の説く「天性英敏なる学生」であって、彼の沼津留学生、大学南校貢進生抜擢に尽力する人物が続出したのも、斎藤に徳が備わっていたと思いたい。

幼くして両親を失った修一郎を助けた叔父。武生騒動（版籍奉還で府中藩主本多家が東京

へ移住したが、華族に加えられずに藩内に不満が生じ、役所や商家に放火、その首謀者とみなされた修一郎の叔父らが捕えられて福井で獄死した）のために叔父の仕送りの断たれた修一郎の学資を助け、沼津の学校にふみとどまらせた新居屋（下宿先）の隠居。福井藩員外生の取締り役、永見裕。員外生で同郷の佐久間正。大学南校貢進生に修一郎を推薦した府中の松井耕雪（文政二年―明治十八年。武生の文化産業の発展に功績のあった町人）。藩臣の本多鼎介らがそうであった。

沼津兵学校附属小学校の勉強はスペリングブックによる英学に始った。一字でも多く覚えて、早く洋書が容易に読めるようになりたい、と修一郎は思った。貢進生になるについては先述の人たちの尽力があったが、本藩の福井が支藩の武生に取った圧抑主義が当を得たものでなかったとの反省が、好意に出たものであろうと修一郎は書く。大学南校貢進生はまず十八の学級に区分され、英学の素養の最もある者はカッケンボスの窮理学、その次の二の組がウイルソンの万国史という工合で、修一郎は十六組に入れられて、墨汁壺に習字本、単語篇を持って寄宿舎から教室へ通った。英学は初心であったが、二の組に編入されて、代数を学ぶ。一年足らずで九の組に昇級した。斎藤が在学中の行動に、学制改革と海外留学運動の二つの建白がある。前者は大学の程度を西洋の大学に近づけて、学生の数を学業、操行の優等な学生にしぼるという考えで、修一郎ら法律専攻と理学部の学生の九名が、文部卿大木喬任、文部大輔江藤新平に面談しその建策を伝えた。その結果、千人以上の学生が三百人内外に選抜され、新しい校長に福井で教えていた英学者瓜生三寅が迎えられた（明治四年）。もう一つは、大学で専門学科を習得したあとは、海外に留学し、西洋学を身につけて日本の学界の進歩に供するというもので、斎藤ら五人の学生は文部大輔田中不二麿らと面接してそれを建白した。その結果、試験成績の順で法学部から三名、理学部から三名、仏蘭西科から一名、独逸科から一名、工学科から二名、全部で十名の海外留学案が文部省で確定された（明治八年）。斎藤の談にもあるように、彼は少年時代よりとかく事を好み、急進思想をよろこび、時に突飛な大言壮語を弄する云々の通りの行動の持主であった。明治八年の七月、横浜のグランドホテルで田中文部大輔から立派な西洋料理の送別の宴を受けて、米仏独に分かれて五年の留学の旅に出る一行十六人のなかの一人、斎藤修一郎の誇らしげな顔が目に浮ぶようだ。

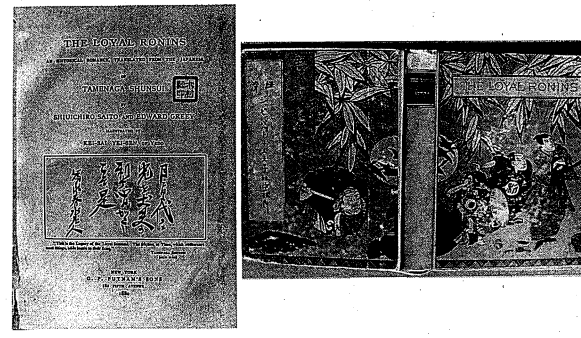
学費年千円のボストン大学留学生、斎藤の米国生活は「甚だ単純にして特筆大書すべきこともない」と語っていて、明治十三年（一八八〇）に帰朝した。しかし『懐旧談』の次の文章を見過すことはできない。

「然るに偶々エドワード、グリーと云う小説家で、日本を材料に使って筆を執って居る人に逢ひ、種々相の上、為永春水のいろは文庫を翻訳して可なり立派な一冊とし、グリー氏と余と同著とし、東洋の小説を亜米利加から出版したことがあったが、可成世間の喝采を博したことがあった。」

これを斎藤はまるで瓢箪から駒が出たような出来事として感想をもらしているが、今日、彼のやったことで残り、後世にも伝えられる仕事はこの著一冊であるといっても過言ではない。

山下　沼津兵学校の福井藩員外生

その一冊とは*The Loyal Ronins*である。英訳者のグリー（一八三五―一八八八）はペリーの日本遠征の一員として初めて日本に来た。日本を題材に少くとも七冊以上の書がある。斎藤の英語の序文によると、文学をもって日本を紹介する必要を感じて選んだのが、有名な作家為永春水の『いろは文庫』で、それが長く続いた日本の封建制度と日本人の忠誠心をよく表わしていると考えたからである。グリーの日本を書いた小説のことを知り、彼にこの翻訳の協力を頼んで引受けてもらった。原稿の清書はグリー夫人がした。それは原作を編み直し、他の資料を加えた忠臣蔵の話になった。興味あるのは米国の大統領シオドア・ルーズベルトが青年時代にこの『忠義浪人』を読んだ時の感興があって、日露戦争の講和談判で日本に深い好意をもつ取り計らいをしたというのである。斎藤は日本文学の著作をこのような形で米国に紹介した最初の一人としてその功績は大きい。沼津の学校で初めて学んだ英学がこんなところにも大いに役に立っていった。斎藤にはこの他に日本の童話美士談などの英訳があったといわれる。



斎藤修一郎・グリー英訳 *The Loyal Ronins* **の表紙および見返し**

あとがき

およそ国の発展を望むには若き人材の育成が肝要である。維新直後、明治政府による改革は急速に進み出したが、まだその緒についたばかりであった。とくに藩政の存続した明治三年ころまでは、時代の要請となった英学教育への藩の取組みが急務となった。幕府の生き残りの観があり、短かい命数で時代と運命をともにしなければならなかった沼津兵学校ではあったが、西周らすぐれた洋学者を擁しての藩の若き子弟教育の務めを立派に果した。福井藩選抜の生徒はよく勉強し、前藩主松平春嶽、瓜生三寅、永見裕らの意見に従い、また福井藩が雇ったグリフィスやワイコフらすぐれた米人教師とも交わって英学の力をつけていた。こうした明敏で進取の気性に富む青少年を松原秀成と斎藤修一郎に見てきたのであるが、日本の英学史上、一時期を画する英学修行の興味ある一場面である。

これを書くには多くの文献を参考にさせていただいたが、わけても沼津市明治史料館の樋口雄彦学芸員には沼津兵学校員外生に関する資料を、また松原秀成のご子孫で兵庫県川辺郡猪名川町在住の熊取正光氏には資料及び写真を提供していただき、ここに厚く御礼申し上げます。

参考文献

『西周全集』第一巻。昭和四十一年　宗高書房
大久保利謙編。「十三　復某氏書」

若越郷土研究　三十八巻一号
頁一九一―二〇八
同　第一巻。「十　燈影問答」頁二四七―二七七
同　第三巻。「福井藩留学生名簿」
「日記及書翰」
「百學連環（抄）」『明治啓蒙思想集』（筑摩書房）
『沼津兵学校』沼津市明治史料館（昭和六一年）
『沼津兵学校と其人材　附属小学校並沼津病院』
大野虎雄　（昭和十四年）
『沼津兵学校附属小学校』大野虎雄（昭和十八年）
『米山梅吉選集』上巻「幕末西洋文化と沼津兵学校」
米山梅吉先生伝記刊行会編
（昭和三十五年）
「永見裕と西周」大久保利謙「傳記」第六巻第十二号（昭和十四年）
「松平春嶽公と永見裕」大久保利謙「傳記」第七巻第一号（昭和十五年）
「官立新潟英語学校」吉田ゆき　「英学史研究」第十五号
日本英学史学会　（昭和五十七年）
「外国人が見た幕末・明治の横浜」（市民グラフヨコハマ）横浜市発行（昭和五十七年）
『福井県南条郡誌』　（昭和九年）
『松井耕雪翁伝』石橋重吉　（昭和九年）
『日米文学交流史の研究』（復刻版）木村毅　恒文社（昭和五十七年）
The Loyal Ronins, An Historical Romance, Translated from the Japanese of Tamenaga Shunsui; by Shuichiro Saito and Edward Greey. pp. 275. New York, G.P. Putnam's Sons. 1880
「斎藤修一郎と武生藩」唐沢富太郎『貢進生―幕末維新期のエリート』ぎょうせい（昭和四十九年）
『東海三州の人物』伊東圭一郎　静岡民反新聞社（大正三年）
「同方会誌」42　（大正五年）
「斎藤修一郎御前講演ノ草稿」『東京帝国大学五十年史』上冊　頁三四四―五
「松原家代々勤書」熊取正光氏蔵
『懐旧談』斎藤修一郎
『グリフィスと福井』山下英一　福井県郷土誌懇談会（昭和五十四年）
「人間　雨森信成」㈠㈡　若越郷土研究三三の四、三三の五